

## 閑話休題 八

しうや りふかふ

霧雨蕭々太の霧雨家はアソウマイ（安蘇生井）の系統の一族であつた。それはそれで事実なのだけれども、安蘇生井の多くが火山信仰を持った北東アジアの騎馬民族であつたのに対し、霧雨家はバイカル湖周辺から南下してアムール川辺りで安蘇生井に加わつた者たちであつた。さらにバイカル以前は西方に住まい、その人種は定かではなく、匈奴（又はフン族）に繋がると言われたり、コーカソイドの流れを汲むとも言われたりした時代もあつたが、現在では中東から北上して東へ進み、ユーラシアの寒冷地を数万年かけて横断しながら独自の環境適応をした集団ということで落ちてきているようだ。

なお、安蘇生井族はインド亜大陸からヒマラヤ山脈を越えて北東アジアに涉り、独自の環境適応をした新モンゴロイドで、アムール川周辺にて肅慎（しゆくしん・みしはせ）等のツングース系の民族と交りながら南下し、更に日本列島に涉つて、それ以降、古モンゴロイドの流れを汲む縄文人と大いに交わり、列島を南下、今の近畿や瀬戸内海辺りまで下つた時期もある民族であつた。

アソウマイという呼称を用い始めたのも実はこの頃で、アイヌ語がその語源である。登美能那賀須泥毘古と連合して皇軍と戦つたが、早々に北へ敗走し、同じく連合して敗走した山盛弊や伊釵敵とともに蝦夷の地に着いたのは6世紀前半頃と言われる。

山盛弊族は同じ火山信仰の民でありながらも南方を経由して来た古モンゴロイドに属し、異なつていた。又伊釵敵族は同じく縄文の血を濃く残す南方系であつたが、海洋民族であり、山岳系で火山信仰の山盛弊とは異なる文化を有していた。

だがいずれにしろ、皇軍に追われたこれら三つの民族が三つ巴となつて神栖檜樞を中心とする一帯に古代連邦を築いたのである。されども、そこも安住の地ではなく、何度も朝廷に脅かされ、遂には伊釵敵が朝廷に寝返つて、皇軍とともに山盛弊・安蘇生井を襲撃することとなり、三民族は6世紀半ばには実質上の隸属状態、8世紀の記録によれば俘囚として朝廷の支配下に置かれ、それ以降は大和民族にまったく同化し、アイデンティティを消して行く。

『眞神族と違つて、朝廷の見做す我らの脅威は小さく、我らへの扱いも高圧的で粗いものであつた。我らは言語も文化も奪われた』

蕭々太はそう呟く。

眞神族とは神栖檜樞よりも北に国家をなし、連邦の諸族よりも古くから列島に住む南方系の民族であつた。その血筋は、比較的短期間にアフリカ大陸・地中海・コーカサス地方・アラビア半島・インド亜大陸を混血しながら經由して東北の地に涉り着いたため、一般の日本人（古モンゴロイドと新モンゴロイドが混ざり合っている）よりも、コーカソイドやネグロイドの傾向を強く残しており、特異な民族であつた。

「彼らは交渉に長け、国も豊かで、兵も強剛であった。又地の利もあった。

比べて連邦は潰崩的に崩れ（もともと異なる民族であったから）、我が安蘇生井はいち早く朝廷の臣下となった伊弉敝族によつて山盛弊とともに圧迫され、竟には全面降伏、最後まで抵抗した我が一族は永く隷属の身に貶められ、しかも同胞が力を削ぎ合うよう、山盛弊が安蘇生井を監視する仕組みまで作られてしまった」

中でも一族内で最も歴史の浅い『雨』の家系、すなわち霧雨家、驟雨家、濛雨家、霖秋家は悲惨であった。

「我が氏族は高い戦闘能力を持った騎馬戦隊であり、又優秀な馬を育てる匠であったが、毎年百頭の牝馬の朝貢を強いられ、軍が解体を余儀なくされたばかりか、交易は崩壊し、先祖伝来の家業では生計が成り立たなくなった」

巨魁なる濛雨土砂降が思わず席を立ち、拳を握つて言う。

「強さゆえ力を削ぐために仕組まれたのだ。一族内の新参だからというばかりではない」

髪長く物寂し霖秋夢弓月はそう言った。土砂降も太腕を組みながら大いに頷く。

「そのとおりだ。強過ぎたのだ」

しかし細身の驟雨龍仁次は皮肉な微笑を泛べた。

「だが敗れた。負ければ賊軍さ。騎馬戦に優れ、天下無双と言つたつて、現に負けていれば意味はない。勝負は時の運とは言つものの、賭け代にするには国家は余りに大き過ぎる」

その言葉に蕭々太も苦々しげに同意する。

「そうだな。

朝廷には圧倒的な国力があった。我らは力弱く、伊弉敝、山盛弊、安蘇生井の順に恭順していった。一度も戦いらしい戦いをしていない。登美能那賀須泥毘古に連合したが、功績は一切伝わっていない。

だから真神族が588年に反乱の烽火を上げたとき、我が国の民は大いに期待した……らしい」

龍仁次は言葉を続けた。

「しかし、歴史は常に残酷だ。艸限弊多原の戦いで真神軍は朝廷に圧勝したにも関わらず、戦闘を指揮した天王天僧晒火去が騙し討たられ、その後の火々禽の柵の戦いで大敗を喫したがため、最後の望みも潰えた」

夢弓月が自分に咳くように寂しく言う。

「その後、我々が山盛弊のように真神の御目付役にされてしまつとはな」

「彼らは夷俘であった。我ら雨の家系はすべてが俘囚であった」

龍仁次がそう言つて頷く。夢弓月が言う、

「税は免除されたが、俘囚の一部は強制移住させられてしまった。遠い者は九州までやられた。夷俘には移配がなかった」

「夷俘は隷属の度合いが低いからな。近くには置けないのさ。だが俘囚には租庸調の免除があった。しかも食糧が俘囚料の給付という名目で与えられた。陸奥・出羽に留まつた俘囚にも与えられた」

土砂降が反駁し、

「しかし移配俘囚は反乱を起こした。出雲で813年頃にあったという荒糧あらかの乱、875年の下総俘囚の乱、883年の上総俘囚の乱なんかだ」

龍仁次が応えて、

「お蔭で897年に移配俘囚の奥羽送還となった。奥羽に戻ってからも無税だし、狩猟生活で得た特産品を以て交易して次第に力を獲得するようになった。中には俘囚長を称した安倍氏、俘囚主を称した出羽清原氏、俘囚上頭を称した奥州藤原氏へとつながり、勢威をもつようになったんだ」

夢弓月は呟く、

「我が一族は持たなかったがな」

土砂降が席に着き、首を振る。

「しかし我々は狩猟や武芸に優れ、治安維持のための軍事力として朝廷に重用された実績もある。狩猟も武芸も同じく馬を巧みに操り、奇襲し、攻めては引く、又蝦夷は騎射を得意とした」

夢弓月が、

「その技術は関東武士たちへ影響を与えたと言われている」

されば龍仁次も、

「俘囚の使った藏手刀わびくたなは武士の使用する毛抜形太刀けぬきがたちの原型とも言われているしな」

蕭々太は嘆息した。

「しかし今更こんなことを語り合っても、埒が開かないだろう。千数百年も前のことをどうしろというのか。村の少子高齢化の方がよっぽど話題にすべき重要な問題だ。民族の誇りは偉大だが、それに縋らなければアイデンティティが保てなくなるような精神状態は危険だ」

皆黙ってしまった。

蕭々と降る雨の音のみ。

夢弓月がポツリと呟く。

「眞神のように古代から資本の蓄積があればな」

「また眞神との比較か」

土砂降がそう難じる。龍仁次も同調し、

「我が邦もけして貧しい地域ではない。むしろ逆だ。眞神の富裕が過ぎるのさ」

夢弓月が思い出したかのように、

「眞神礼讃と言えば、璃史朗め、眞神あまみの天易真あまやす分に最近、逢ったらしい」

蕭々太が顔を上げて、

「ほう。あの真分か」

土砂降も聞き返し、

「璃史朗って、驟雨璃史朗か」

「おうき、智慧を聞きかじって大いに自慢しているらしい」

「どんなふうに」

龍仁次が問うた。

「すべて存在は人間を動かすための動機を生じさせる信号に過ぎない、だから本質（イデオ）性がない、一切は唐突で理解は心的な現象でしかない、それなのに諸君らは執著して争い、夢見希い、悲嘆し恨む、真に愚か極まりない、と」

蕭々太が寂しげに微笑し、

「ほう。」

そういう感慨も見做されたもの、造られたものに過ぎないんだがな。智慧者も愚者も同じでさえない。わかっている者は何も知り得ていないし、知らぬ者もまったく理解しているのさ」

龍仁次が疑念を呈し、

「それはそうだろうが…」

夢弓月も、

「もしそうなら、どうしたらいいんだろう」

蕭々太が笑いながら、

「おまえらは、いくつだ」

「二十五さ」「二十四です」「二十三になった」

「もはや十分に実績を積んでいるじゃないか。四半世紀近くも生きていて、今更それを問うまいよ。その都度迷うて悩み、思慮して選び、選んだ道を只管果敢に逝く、他に何ができる？ それに関しては選択肢がない。つまりは龍の肯定だ。しからば龍の如く肯んぜよ」